

最近テレビやインターネットを見ていて気になるのは、外国人に日本や日本人を好意的に、またそれ以上に褒めたたえさせる番組やニュースが人気を博していることだ。もちろん、外国人から褒められて日本人として悪い気はしないが、バブル経済崩壊後の総自信喪失状態を思い返すと、まちや街並みについては、果たしてそのようなかな、と疑問に思う。

※「わが国の街並みは」新規に開発された地区や美観形成に取り組んでいる一部のまちを除けば、総じて建物があれば単にたくさん集まっているだけの所が多く、清潔ではあるが決して美しいまちや街並みとは言えないというのが、以前からの内外の評価だったし、筆者もそう感じているからだ。

わが国でも昔の街並みが残っている所で美しいといわれるまちは各地にある。昔は建物を建てる時に建材や技術が限られ、またエアコンのように居住環境をコントロール

座標



ールするすべを持たなかったから、同じような建て方をして結果として統一的な景観が形成された。しかし、それだけでなく美しさを意識した伝統や社会的な縛りもあったのかもしれない。現代はそうした制約や縛りがなくなり、また制約や規制よりも自由が尊重され、街並みが乱雑になった。美しい街並みのお手本だった欧州のまちも、現代は大都市郊外で同じような状況だが、美しいまちや街並みを維持するための法的な仕組みや詳細な都市計画を定め、これを実行する努力を怠っていない。わが国でもより詳細で規制力が

住民主体の認識深めて

ある地区計画という仕組みを都市計画制度の中に組み込んだり、より良い景観を形成していくための法律などを定めているが、実効力のある仕組みになっていない。

実は整った美しいまちや街並みは、土地の資産価値を向上させた。観光魅力を向上させて観光収入を増やすという経済効果がある。また何よりも、そこに住んでいる住民たち自身が、毎日を美しい町に快適に住む幸せに恵まれる。そこがあまり理解されていないようだ。

それでは、こうしたまちや景観は誰が創るのだろうか。筆者はその主体は住民たちであると考えている。それを示す一つのデータを紹介する。国土交通省の「建設投資見通し」によれば、平成26年度の全国の建設投資約4兆5000億円のうち、住宅や店舗、工場などの民間投資が約58%を占め、残りの42%が、公共施設や目見えにくい上下水道や防災施設などを

美しいまちの形成

整備する政府部門である。まちや街並みは、毎年の建設の積み重ねで形成されるものだから、なおさら民間の比重は重い。

毎年の民間建設の二つ一つが街並みや景観に配慮していけば、美しいまちや街並みを形成していくのはそう難しくないのではないか。もちろん、民間活動を下支えるインフラ投資や景観形成の合意形成の誘導をし、景観ガイドラインを社会に浸透させる行政部門の役割が重要であることは言うまでもない。その上で、住民の日頃の建設の重要性がもっと認識されるべきだ。

一般社団法人「政策集団地域再生青森会議」代表理事

佐々木俊介

(東京都練馬区)